

「2種の日本産コナラ属植物に寄生するカシワホシブチアブラムシ 種群の分類学的再検討」

生物生態・体系学講座 昆虫体系学分野
梶谷 広平

(背景と目的)

カシワホシブチアブラムシ種群、すなわち *Tuberculatus* 属が本研究で扱う昆虫である。*Tuberculatus* 属は背中に特徴的なトゲ状構造を有しているアブラムシである。現在は、60 種程度が報告されており、主にコナラ属の植物を寄主としている。アリ随伴型であり、繁殖能力を有した個体は雄・雌いずれも翅を持つが、寄主転換は行わない。

1917 年、松村松年氏により *Tuberculatus quercicola* が記載された。また、1918 年に Essig 氏および Kuwana 氏によって、独自に *Tuberculatus macrotuberculata* が記載された。

松村氏は、1917 年に自身が命名した種と 1918 年に Essig 氏らが記載した種は同様のものであると判断して、1919 年に Essig 氏らが記載した種は自身が報告した種の異名種であると発表した。

長らく、この説は採用され続けていたが、近年の研究により、両方の種には形態学的な差異が認められることが分かった。

本研究はこれら 2 種の再記載を通して、両者の分類学的な立場の再検討を行うのが目的である。

(方法)

両者は寄主植物が異なる。松村の種はミズナラに、Essig 氏らの種はカシワに生息している。ミズナラとカシワ、それぞれの個体群からサンプルを採取して、標本を作製、光学顕微鏡を用いて形態観察を行い、両者の形態学的な差異を比較する。

計測部位は、後脚腿節、背部のトゲ、触覚第 6 節、尾片、である。それぞれの形状や長さを観察した。また、体への色素の染まり具合なども観察した。

(結果)

両者には形態学的な差異が確認された。主成分分析を用いると、2つの寄主植物由来の集団は明瞭に2分された。また、判別分析を用いても、2つの寄主由来の集団は、誤判別なしに2つの集団に分離できた。寄主植物が異なると、同所的に分布していても、形態の差は明瞭であった。

(考察及び結論)

結果から、これら 2 種は異名関係にあるわけではなく、別種であると判断できる。

両者が分類学的に適切な認識を得たことによって、本研究は煩雑な昆虫分類体系の整理にわずかながらでも貢献できたと言えよう。